

2014年度 卒業論文

# 日本における国際児のアイデンティティ

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

学籍番号：31156633

杉山 香央利

## ■概要

日本には様々な民族的・文化的背景を持つ人々が暮らしている。韓国系、中国系、沖縄、アイヌの日本人のほか、80年代以降に日本へ移住したニューカマーと呼ばれる日系人等、多様なバックグラウンドを持つ人間が同じ社会で生活している。また、外国人の流入と同時に日本人の海外流出も増加傾向にある。外務省の統計<sup>1</sup>によれば、2013年現在、海外に在留する日本人の数は約126万人で、昭和43年以降過去最多となった。このように国際的な人の交流が増えると、複数の民族的あるいは文化的ルーツを持つ「国際児(international children)」も益々増えていくのは自然なことだ。「国際児」の問題は日本だけでなく、時代の流れを反映する世界規模の現象である。だが少なくとも日本では、「国際児」でないマジョリティ側の彼らに対する認識が十分であるとは言い難い。それぞれの「国際児」への固定観念、差別、偏見がまだ多く存在しているのは問題だ。本稿では、「国際児」を一つの集団として一括りにして論じるのではなく、集団を構成する主体としての個人がどのようなアイデンティティを形成しているのかを個人の語りを通して考察する。本稿で使う「国際児」とは「二つ以上の国や文化にまたがって生育した子ども」のことであり、「国際児」を広義にとらえる。本稿が、日本人マジョリティと国際児たちの相互理解を促進する一助になれば幸いである。

---

<sup>1</sup> 外務省「海外在留邦人数調査統計」(平成26年要約版、最終閲覧日2014年12月2日、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000049149.pdf>)

## ■目次

### 第1章 はじめに

- 1-1. 研究の背景
- 1-2. 研究の目的
- 1-3. 研究の方法

### 第2章 国際児に関する研究—概観

- 2-1. 国際児とは何か
- 2-2. 国際児の文化的アイデンティティに関する先行研究と考察

### 第3章 国際児へのインタビュー

- 3-1. インタビューの概要
- 3-2. インタビュー協力者の紹介
- 3-3. インタビュー

### 第4章 インタビューから得た考察—ナラティブ分析

- 4-1. 国際児であるということへの意識
- 4-2. 文化的アイデンティティ
- 4-3. 文化的アイデンティティの形成要素
- 4-4. マジョリティ社会への欲求

### 第5章 おわりに

## 第1章 はじめに

### 1-1. 研究の背景

自分はなに人か？—筆者がこの疑問を持ち始めたのは、覚えている限り中学生の頃である。以来、このテーマについて考えをめぐらせてきた。この問いは筆者自身の生い立ちに由来するものであり、また、国際児に対する理解促進を目的とする本稿の出発点である。

筆者は国際児の一人である。日本人の父と台湾人の母をもち、台湾で生まれ、日本で育った。日本の公立学校で教育を受ける一方、家庭では母が台湾語を話し、台湾料理を食べ、毎年家族で台湾の親戚を訪れた。小学生の頃までは、そのような「みんなとは違う自分」にある種の優越感を覚えていた。だが、中学生になると、日本と台湾のどちらにおいても自分は周囲と「何かが違う」と感じるようになった。「日本人」として括られると台湾にルーツを持つ自分が否定されるような気がし、かといって日本で圧倒的に多くの時間を過ごした自分が「台湾人」と名乗ることも違う気がした。日本人と言われればそうだが、そうでないとも言える。台湾人と言われれば、そうではないが、そうとも言える。そのような状況に、もどかしさを覚えるようになった。

高校は、帰国子女や在京外国人を受け入れ、国際的で自由な校風の学校を選んだ。ここでは一人ひとりが違うということが当たり前であり、様々なバックグラウンドを持つ友人と触れ合う中で「自分はなに人か？」という疑問から解放された。そんな問題は重要ではないと思い始めた。

以上の実体験を経て、国際児のアイデンティティについて研究しようと思ったきっかけは、中国帰国者の子どものアイデンティティに関する研究への接触だ。異文化間に育つ子どもの「アイデンティティの揺れ」や「世代間の葛藤（母子のコミュニケーションが不十分になるケース）」が自らの経験とぴったり重なった。それらにも様々な様相があると知り、もっと深く探求してみたいと考えた。

大学1年の夏に台湾で参加したスタディツアーでの体験も影響を与えている。多国籍の華僑青年が生活を共にしながら台湾を周遊するというプログラムで、多くの華僑青年と出会った。彼らは私と同様、両親又は片方の親が中国や台湾にルーツを持ちながら、その他の国に生活の基盤を置いていた。このツアーで、ルームメイトのオランダ人華僑が言った言葉が非常に印象に残った。彼女は広東系の両親を持ち、ときどき香港を訪れるという。彼女はこう言った。「私はオランダに居る時には自分は香港人だと思い、香港に居る時には自分はやはりオランダ人だと思う。いったい自分がなに人なのかわからない。」複数の文化にまたがって成長したり、自分が「どこに属するのか」と悩むことは、実は世界中で多くの人の中に起こっている出来事なのではないだろうか。また、出会った華僑青年らは、中国・台湾文化の習得度、中国語のレベル等にそれぞれ差があった。日本からの参加者に関して言えば、中国語が流暢な者、台湾文化に慣れ親しんでい

る者がいる一方で、全くそうでない者もいた。日本と台湾という同じ文化の境界領域で育っていても、個々人が持つ経験、文化、帰属意識は、共通する部分もあれば異なる部分もあるという点は大変興味深い。

以上の背景から、複数の文化が交差する環境の中で成長した国際児のアイデンティティを、特に個人に注目して分析していきたい。

## 1-2. 研究の目的

本稿の目的は、日本に暮らす国際児のアイデンティティと、その形成に影響を及ぼしたと考えられる経験等を明らかにし、国際児ではない日本人マジョリティの国際児に対する理解促進の一助になることである。後述するように、本稿における「国際児 (international children)」は、「二つ以上の国や文化にまたがって成長する子ども」という広義の国際児を指す。その際、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども」という狭義の「国際児<sup>2)</sup>」はもちろん、在日外国人同士の子ども、海外に在住する日本人の子ども、帰国子女なども含む。このように「国際児」を広い意味でとらえるのは、同じ民族的・文化的背景をもつ者同士（例：日本人と台湾人の間に生まれた子ども）でも条件や文化的アイデンティティに差があったり、全く異なる背景をもつ者同士（例：日本人と台湾人の間に生まれた子どもと海外で育った日本人の子ども）が類似の体験をもったりするからである。したがって、「ハーフ (ダブル)」「在日外国人」「帰国子女」などと一括りにするのではなく、彼らを広く国際的なバックグラウンドをもつ「国際児」として一人ひとりの多様な個性を見る必要があると考えられる。

## 1-3. 研究の方法

本稿では以下の質的研究手法を用いる。

### (1) 事例研究

前項で述べた通り、本稿では「国際児」を広義にとらえる。そのため、後に第2章で説明する狭義の「国際児 (所謂ハーフ)」よりも、更に多種多様な国際児を研究対象とする。狭義の「国際児」でさえ、その一人ひとりが微妙に異なる条件を持つため、「同じ」国際児を数多く集めることは難しい<sup>3)</sup>。広義の国際児の条件を厳密に統制することが困難であるのは言うまでもない。したがって、本稿では量的研究よりも質的研究に成果を期待し、個人インタビュー法を用いて個々の対象を探求していく事例研究を行う。

---

<sup>2)</sup> 鈴木一代(2004)、「「国際児」の文化的アイデンティティ形成 —インドネシアの日系国際児の事例を中心に」、『異文化間教育』19号、pp.42-53

<sup>3)</sup> 鈴木一代 (2008)、『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』、ブレーン出版、p.37

## (2) ナラティブ研究

「ナラティブ」には「物語」と「語り」という二つの意味が含まれており、前者は、語られる事柄の具体的内容を表し、後者は、他者に対して「語る」という行為を指す<sup>4</sup>。つまり、ナラティブ（「物語」と「語り」）は人々の経験の反映である。社会構成主義は、人間の自我が孤立したものではなく、他の人間とのかかわりにおいて社会的に形成され、とりわけ言語によって行われていることを明らかにした<sup>5</sup>。この意味で、アイデンティティとは自分を何者だと認めるという自己認識に他ならないが、それは他者との交わりの中でのみ獲得される相互的なものだといえる<sup>6</sup>。本稿ではこのようなアイデンティティの相互性に着眼し、国際児自身のナラティブから彼らのアイデンティティを明らかにしていきたい。尚、本稿では、自己同一性、パーソナリティ、文化的アイデンティティ（帰属感）、エスニック・アイデンティティ等といわれる全てのアイデンティティが自己アイデンティティの中に位置づけられているものとする。

ナラティブ研究の手順は、ジョン・W・クレスウェル<sup>7</sup>を参考にした。国際児のアイデンティティの複雑性や傷つきやすさ等を読み手に伝わりやすくするために、国際児自身の「語り」を出来る限りそのまま記載する方法を採った。

事例研究とナラティブアプローチによって国際児のアイデンティティについて解明した先行研究には、山本須美子<sup>8</sup>や川上郁雄<sup>9</sup>がある。

## (3) 国際児自身による研究

冒頭で述べたとおり、筆者は国際児の一人だ。したがって、インタビュー協力者である国際児の方々により近い立場でお話を伺っているのが本稿の大きな特徴である。国際児自身による研究のメリットは、研究対象者となる国際児にとって、相手（研究者）が同じく国際児である場合の方が自身の経験を話しやすいということだろう。後述するように、実際、本稿のインタビュー協力者の一人であるハナコさんは、「相手（筆者）もハーフなら特別扱いされることなく、心開けると思った」という理由からインタビューを受けてくださった。

日本における国際児の増加が比較的新しい社会現象であるために、国際児自身による、

---

<sup>4</sup> 船津衛（2011）、『自分とは何か―「自我の社会学」入門』、恒星社厚生閣、p.177

<sup>5</sup> 船津衛（2011）、前掲書、p.175

<sup>6</sup> 田丸徳善(1998)、「アイデンティティとは何か」、『国際化時代のアイデンティティ―民族と文化の揺らぎのなかで』、春秋社、p.17

<sup>7</sup> ジョン・W・クレスウェル著、操華子・森岡崇訳(2007)、『研究デザイン―質的・量的・そしてミックス法』、日本看護協会出版社、pp.221-222

<sup>8</sup> 山本須美子(2002)、『文化境界とアイデンティティ―ロンドンの中国系二世』、九州大学出版会

<sup>9</sup> 川上邦雄（2010）、『私も「移動する子ども」だった―異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー―』、くろしお出版

国際児のアイデンティティに関する研究は少ない<sup>10</sup>。本稿が今後の国際児のアイデンティティに関する研究に新たな視座を提供できれば幸いである。

## 第2章 国際児に関する研究—概観

### 2-1. 国際児とは何か

#### (1) 狭義

「国際児」を広義にとらえる場合、それぞれの国際児を指す呼び方が存在する。「国際児」という言葉自体は、一般的には「ハーフ」や「混血児」と呼ばれてきた子どもたちの新しい呼称として、国際児童年の1979年に提案された<sup>11</sup>。「混血」の子どもたちの呼称は時代によって、「合いの子」「混血児」「ハーフ」「ダブル」というように変遷してきた。最近では、テレビや雑誌でハーフのタレントやモデルが人気を得ている。「ハーフ」は「半分だけ日本人」という否定的なニュアンスを含む呼称でありながら、肯定的なイメージを人々に与えるようになった。その語源から肯定的な意味合いを含む呼称として、「ダブル」や「国際児」があるが、一般的には定着していない。鈴木一代は「国際児」という呼称を用いることを推進している。文化や人種などの違いよりも、国籍の違いを強調する日本人の特徴を考慮すると、「国際結婚」のように「国際児」も一般的に受け入れやすい言葉であり、さらに「国際児」が中立的で肯定的なイメージをもつことが理由として挙げられている<sup>12</sup>。

スティーブン・マーフィー重松における「マルチエスニック人<sup>13</sup>」は、鈴木「国際児」と同じ、狭義の「国際児」を指している。マーフィー重松は、「複数の民族的バックグラウンドを持つ人」を「マルチエスニック人」と呼んでいる。「日米ハーフ」である自身のことも「マルチエスニック人」と呼び、異民族間に生まれた「ハーフ」としての「マルチエスニック人」を扱っている。

#### (2) 広義

鈴木やマーフィー重松の著書における「国際児」や「マルチエスニック人」は、いわゆるハーフやダブルという意味での狭義の「国際児」であった。それとは異なり、「国際児」を広義にとらえようとする立場もある。石河久美子は「国際児」を「二つもしくは二つ以上の文化にまたがる子どもたち<sup>14</sup>」としている。そこには、日本人と外国人に

<sup>10</sup> 鈴木一代(2008)、前掲書、pp.38-39

<sup>11</sup> 鈴木一代(2008)、前掲書、pp.2-3

<sup>12</sup> 鈴木一代(2008)、前掲書、p.4

<sup>13</sup> スティーブン・マーフィー重松(1994)、「マルチエスニック人と日本社会」、現代のエスプリ『異文化接触と日本人』、至文堂、pp.177-185

<sup>14</sup> 石河久美子(2003)、『異文化間ソーシャルワーク』、川島書店、pp.47-56

よる国際結婚家族のみならず、日本で知り合った外国人同士の家族や、家族で日本にやってきた外国人移住労働者の家族などの「国際家族」から生まれた子ども全般が含まれる。

川上が用いる「移動する子ども」という言葉も前述の広義の「国際児」と同義であると考えられる。川上は、国境や複数の言語の間を「移動」しながら成長し、その結果、外国語教育や母語教育などのカテゴリーの間を「移動」する子どもたちを「移動する子ども」と呼んでいる。同書は、成長期に「移動する子ども」だった、現在社会で活躍している大人たちへのインタビューを、二つのカテゴリーに分けて収録している。一つ目のカテゴリーは、日本以外の国で幼少期を過ごし、後に日本にやってきた人々。もう一つのカテゴリーは、幼少期から日本に暮らしながら、複数の言語の中で過ごしてきた人々である。民族的バックグラウンドは問わず、言語形成期を海外で過ごしたか、或いは日本で過ごしたかという点で「移動する子ども」を二つのカテゴリーに分けている点が同書の特徴だ。狭義の国際児をはじめ、日系ブラジル人、在日コリアン、その他の外国籍をもつ子ども等、多様な文化的・民族的バックグラウンドや「移動」の経験をもつ「移動する子どもたち」のライフストーリーを紹介している。したがって、川上の著書で使われている「移動する子ども」という言葉は、広義の「国際児」と同じ意味をもっていると解釈できる。

### (3) サードカルチャーキッズ (TCK)

「国際児」よりも一般的になりつつあるのが「サードカルチャーキッズ (以後、TCK)」という呼び名である。Youtube で「TCK」と検索すれば、関連動画がたくさん見つかる。

TCK とは、発達段階の多くの年数を両親の属する文化圏の外で暮らし、両親が生まれた国の文化を第一文化、現在暮らしている国の文化を第二文化として、その二つの文化のはざままで独自の生活文化（第三文化）を創造していく子どもたちのことをいう<sup>15</sup>。また、成長して大人になっている場合はアダルトサードカルチャーキッズ (ATCK) と呼ばれる<sup>16</sup>。例えば、シンガポールで育ったアメリカ人、オーストラリアで育った日本人、中国で育ったイギリス人、日本で育ったベトナム人、アルゼンチンで育ったノルウェー人の父とタイ人の母を持つ人などである。日本でいうところの「帰国子女」は TCK に当てはまる。

「TCK」という用語は 1950 年代、二人の社会学者、ジョンとルース＝ヒル・ウシーム夫妻によってつくられた。彼らは当時、植民地インドにおける海外駐在員（軍人・宣教師・技術者・ビジネスマン・教育者・報道関係者）が「母国とは異なり、また現地

---

<sup>15</sup> デビッド・C.ポロック&ルース＝ヴァン・リーケン著、嘉納もも訳（2010）、『サードカルチャーキッズ 多文化の間で生きる子どもたち』、スリーエーネットワーク、pp.34-36

<sup>16</sup> デビッド&ルース（2010）、前掲書、p.19



のものでもない」独自のライフスタイルをもっていることを発見する。そして、そのような海外駐在員に特有の生活スタイルを「はざま文化」または「二つの文化の間の文化」とし、「第三文化」と名づけた。さらに、この「はざま文化」で育った子どもたちを「サードカルチャーキッズ（第三文化の子どもたち）」と呼んだ<sup>17</sup>。

デビッド&ルースによれば、ATCKに関する最近の調査報告書でウシームは第三文化の定義を次のように述べている。

ある一つの文化とは異なる文化とかがかわる過程で人々が「創り、共有し、学習する」一つのライフスタイル、これを議論する際に用いる包括的な概念が「第三文化」である<sup>18</sup>。

さらに TCK については「親に伴って別の社会に移動する子どもたち」とした。この「別の社会に移動する」ということが物理的な移動だけでなく、文化や言語の境界といった

心理的な移動も含むと解釈するならば、「TCK」は、前項で挙げた広義の「国際児（石河）」や「移動する子ども（川上）」と類似の意味合いをもつ用語であると言える。しかし、デビッド&ルースにおいては、TCK の物理的移動経験が強調されていること、挙げられる TCK の共通点（例：特権的な階級、早晩の帰国）に当てはまらない国際児は TCK といえるのかという疑問が残ることから、本稿では TCK と広義の「国際児」を同義にすることは保留にする。また、「TCK」には、その用語自体に、子どもたちが文化や国境間の移動に伴い、親の出身国や居住国の文化とは異なる独自の文化（第三文化）を形成するという意味合いが込められていることから、それを前提としない「国際児」とは区別すべきであると考え。ただし、「TCK」という言葉とその概念について知ることは、国際児を理解する上で重要なことであり、日本でも認識が広まることを期待したい。

## 2-2. 国際児の文化的アイデンティティに関する先行研究と考察

ここでは、国際児に関する先行研究のうち、とりわけ彼らの文化的アイデンティティに関する研究に的を絞って考察したい。

まず、鈴木によると、「文化的アイデンティティ」とは「自分がある文化に所属しているという感覚・意識」或いは、「ある文化や社会の中に自分の居場所がある感覚・意識」のことである<sup>19</sup>。特筆すべきは、文化的アイデンティティというのは自分が思うだけでなく、他者からも認められて初めて安定したものになるという点だ。そもそも「ア

<sup>17</sup> デビッド&ルース（2010）、前掲書、pp.35-36

<sup>18</sup> デビッド&ルース（2010）、前掲書、p.37

<sup>19</sup> 鈴木一代(2008)、前掲書、pp.32-33

アイデンティティ」の概念について、田丸徳善は次のように説明している。

それは単に「私＝自我」をさす別名ではなく、「社会のなかの私」という具体的なあり方を言い表すものなのである。つまり、それは主観的であるとともにまた客観的でもあり、自分はいつもこの同じ自分なのだという強い感情に裏付けられる一方で、他人からもそのように認められることを含意している。あるいは、それはこの自己についての肯定と自信であるとともに、何か他なるものへの帰属の感じをも含むのである<sup>20</sup>。

デビッド&ルースは TCK の文化的アイデンティティを次のように表した。

TCK はあらゆる文化と関係を結ぶが、どの文化も完全に自分のものではない。TCK の人生経験は彼らに関わったそれぞれの文化から取り入れた要素で成り立っているが、彼らが帰属意識を覚えるのは同じような体験を持つ人々との関わりにおいてである<sup>21</sup>。

TCK にとっては必ずしも地理的な場所が故郷を意味するわけではなく、故郷の定義が、第三文化のコミュニティーや学校など、「人との絆」にとって代わる場合があると指摘している<sup>22</sup>。

川上は、アイデンティティとは、自分の姿やあり方について「自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」と考える<sup>23</sup>。つまり、「自分が思うこと」と「他者が思うこと」が自分の中で統一した像を描けない時に生じる混乱や葛藤などによって形成されるものがアイデンティティである。そして、「移動する子ども」の場合、そのアイデンティティに影響を与えるのは、様々な人々に様々な言葉を通じて接触した経験と、自分の複数の言語能力についての意識であると述べている。当事者へのインタビューから、子どもたちは、自分が持っている言語やその背景について、周りの目線や見方を敏感に感じながら生きていることを明らかにした。さらに、「自分が思うこと」と「他者が思うこと」をすり合わせ、アイデンティティ・クライシスから脱するためには、「自己と他者の関係性」を再構築する「言葉の力」が必要だと主張している。

鈴木は、インドネシアに暮らす日伊国際児を事例に、国際児の文化的アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因に「居住地（国）」「日本人の親の性別」「両親の国の組み合わせ

---

<sup>20</sup> 田丸徳善(1998)、前掲書、pp.14-15

<sup>21</sup> デビッド&ルース (2010)、前掲書、p.34

<sup>22</sup> デビッド&ルース (2010)、前掲書、p.162

<sup>23</sup> 川上邦雄 (2010)、前掲書、pp.209-214

わせ」「国際児の外見的特徴」「家庭環境」「学習環境」を挙げている<sup>24</sup>（マーフィー重松は「個人的な嗜好」もその要因として挙げている）。発達過程でそれぞれの要因が複雑に絡み合い影響しあうなかで、国際児は、複数文化を常に意識しながら、自分自身の文化的アイデンティティを一生模索していくと推察している。

マーフィー重松は、国際児（狭義）が国際児としてのアイデンティティ、つまり二つの文化の混合のアイデンティティを形成するには、二つの言語と文化を習得していることが必要不可欠であると指摘している<sup>25</sup>。世間が期待する文化的知識を身に付ければ、ある集団に所属していると自信をもって言えるからである。さらに、言語はその最たる基本であると述べている。この点は前述の川上と意見が一致している。

鈴木においても、国際児が国際児としてのアイデンティティを形成する上で、二言語・二文化習得の重要性が指摘されている<sup>26</sup>。親から子への二言語・二文化の継承については、国際家族ならばそれらが継承される可能性があるが、必ずしも継承されるわけではなく、どちらかの言語・文化が主に継承される場合もあれば、発達の途中で継承される言語・文化が変化する場合もあることを明らかにしている。よって、国際児の文化的アイデンティティ形成も多様であることを指摘している。さらに、鈴木は、国際児自身が二言語・二文化を習得するだけでなく、国際児を受容する社会が必要であると述べている。

まとめると、先行研究が明らかにしている国際児の文化的アイデンティティについて次のようなことが言える。

- ①国際児が帰属意識を覚えるのは、国や地域という地理的な場所に限らず、同じような経験を持つ人との関係や独自のコミュニティーにとって代わる場合がある。
- ②国際児の文化的アイデンティティ形成には、様々な人と接触し、自分がもつ複数の文化や言語について社会的文脈のなかで解釈する経験が大きく影響を与える。
- ③他には「学習環境」や「外見的特徴」などの様々な要因が相互に影響しあい、国際児の文化的アイデンティティは成長過程で変化しながら形成され、その過程は一生続いていく。
- ④国際児が国際児としてのアイデンティティ（混合のアイデンティティ）を自信をもって主張できるようになるには、他人からの承認が必要があり、それは自分自身もつ複数の文化・言語を習得することによって可能である。
- ⑤国際児が国際児としてのアイデンティティを形成するためには、国際児を受け容れる社会が必要がある。

---

<sup>24</sup> 鈴木一代（2008）、前掲書、pp.276-278

<sup>25</sup> S・マーフィー重松（2002）、『アメリカンの子供たち—知られざるマイノリティ問題』、集英社、p.192

<sup>26</sup> 鈴木一代（2008）、前掲書、pp.310-311

以上が、先行研究で明らかとなっている国際児がもつ文化的アイデンティティの概観である。

国際児の文化的アイデンティティの最大の特徴は、それが他者との関わり合いにおいて変化しながら形成され、その過程が一生続いていくということである。それは、文化的アイデンティティというものが、自分がどこかに帰属しているという安心感に他ならないからである。その安心感がひとたび揺らいだり、逆に強まる出来事があれば、文化的アイデンティティにも微妙な変化が生じる。

文化的アイデンティティが「他人が思う自分」と「自分が思う自分」が一致し、他者から承認された時に初めて安定するならば、国際児自身が「他人が思う自分」に近づいていくこと（例えば、二言語・二文化を習得すること）だけが、国際児が国際児としての安定したアイデンティティを築く手段ではないはずだ。移民が多い他の先進諸国に比べると、多種多様な人間が同じ社会に暮らしているという認識が日本ではまだ薄い。例えば、「日本人のように見えない」人は外国人と判断され、外国人っぽく振舞うように期待される。一方、「日本人のように見える」人は日本人と判断され、日本人らしく振舞うように期待される。名前が日本人のものでないだけで、同じ日本で生まれ育ったにもかかわらず異質なものとして差別を受ける。このような想像力の足りない認識の方法は誤りだと証明する人が、今の日本には大勢暮らしている。日本には様々な民族的バックグラウンド・文化的アイデンティティをもつ人々が暮らしている事実が、常識のように受け容れられていかなければならない。そのためには、日本で暮らすあらゆる国際児の事例が人々に紹介されていくべきだと考える。

### 第3章 国際児へのインタビュー

#### 3-1. インタビューの概要

本稿の目的は、日本に暮らす「国際児」の経験や意識、彼らの文化的アイデンティティの様相等を明らかにし、日本人マジョリティの彼らに対する理解に役立つことである。インタビューの目的は、それらを「アイデンティティは他者との関係と交わりのなかでのみ獲得される相互的なもの」という第1章で触れた社会構成主義に基づく理論を根拠に、国際児自身の「語り」から明らかにしていくことである。

異なる文化的背景をもつ三人の国際児の方々に直接お会いし、ビデオをまわしていない時間も含めて30分ないし1時間のインタビューを行った。三人とも筆者の友人、及び友人の紹介で知り合った方である。知人をインタビュー対象としたのは、国際児のアイデンティティが複雑で繊細な課題であるために、それを語る側と語られる側との間に信頼関係が求められると考えたからである。そのため、三人は女性・大学生という点で

属性の偏りがあるが、それを意図して選別したわけではない。

彼女たちに具体的に聞いたかったことは、自分の中にある複数文化をどのように認識し位置づけているのか、日本で暮らす国際児だからこそ経験したこと、それぞれの国際児がもつ文化的アイデンティティとその形成に影響を与えた要素等である。インタビュー協力者の方々にご了解頂いた上で、インタビュー内容を録音、録画し、文字起こした。

本章では、協力者一人ひとりと筆者の間で交わされた会話を、出来る限りそのまま記載している。話し方（使う言葉、言いよどみ、沈黙等）や論の展開自体にその人の「アイデンティティ」が表れると考えるからだ。したがって、必要に応じ、その時の協力者の様子や発言の背景にある情報、筆者の解釈等を挟み込んだ。次章でインタビュー内容の更に深い分析を行っていくこととする。

### 3-2. インタビュー協力者の紹介

インタビューに協力して頂いた方々の名前とプロフィールは以下のとおりである。名前は原則仮名とする。

国際児① アンさん：

父親は韓国出身の韓国人、母親は在日コリアン二世。日本で生まれ育つ。小学校をインターナショナルスクール、中学校を私立女子校、高校を都内にある国際系の高校で過ごす。趣味はダンス。大学を休学し、ニューヨークへ1年間のダンス留学を経験。

国際児② 王さん：

台湾出身の父と中国出身の母のもと、川崎で生まれ育つ。小学校を日本の公立学校で過ごし、中学・高校は中華学校へ通う。小学校・中学校時代は1～2年に一度、父の故郷である台湾を訪れていた。家庭では基本的に日本語を話す。現在、大学の国際学部で学び、台湾への留学を視野に入れている。

国際児③ ハナコさん：

日本人の父とカナダ人の母の間に生まれる。日本で生まれ、生後まもなく父の仕事の都合でアメリカに移住。5歳の時に日本に戻り、以後日本で育つ。幼い頃から英語と日本語を使う環境に身を置く。大学では多文化共生論や国際協力について学ぶ。1年休学し、母の故郷カナダへの留学を経験。

### 3-3. インタビュー

## 国際児① アンさん<sup>27</sup>

アンさんは大学の授業の前に時間をつくり、インタビューに応じて下さった。彼女と私は高校時代の同級生である。インタビューの語りの中でも触れられているが、アンさんは現在通名を使っている。だが、私は今でも彼女を本名（フルネーム）で呼んでいる。メールでインタビューの依頼をしたところ、すぐに「協力したい」と快く承諾して下さい。まず、アンさんにご自身について紹介して頂いた。

### i. 自己紹介

「坂井アンです。母親が在日の二世で、父親が韓国人で、母親と結婚して日本にきた。だから、日本人の血は一切、一滴も入ってなくて、でも、えっと、日本で生まれて日本で育って、で、家庭の中はもちろん全部日本語使って、韓国語は一切喋れない状況です。」

—なるほど、ありがとうございます。では、いつもはどのような風に知らない人に自己紹介をしている？

「高校・・・ん、大学入る前まではずっと本名で、韓国名で、やってたけど、大学入っからは通名使うようにして、そこから坂井アン（日本名）になったんだけど...普通に『坂井アンです』と言って、なるべく、まあ（在日であるところは）隠すように、あんまり大っぴらに自分の背景をそんなに言おうとは思わないかな。」

—それって相手によって変えたりとかする？例えば、アメリカではこういう風に自己紹介してたとか、大学の友達にはこうとか。

「えっと、まあ普通に、日本人ってか、大学内で自己紹介する時は、全部日本名で通して。でも、もし、なんだろう。自分と似たような背景の子、例えば、韓国人の子がいたりとかしたら、『実は韓国人なんだ』ってことを言った方が、相手も親近感みたいなのを感じてくれるから、そういう時には言うけど、まあ普通の時は言わない。なるべく日本人として通すように。」

—韓国人や在日コリアンの人には親近感を感じる？

「親近感湧くね。」

—他の友達には自分や親の民族的な背景を知ってほしいと思う？

---

<sup>27</sup> インタビュー実施日：2014年10月27日

「うーん、自分では正直、隠そうとしてる。なるべく日本人らしくしようと。あんまり知られたいとは思わない。」

—今いる友達のなかで、アンさんが在日コリアンであることを知っている人は少ない？

「大学入ってからは、通名でやってるから、（周り）ほとんど知らない。あんまり、言いたくないなあ・・・と思う。」

はじめに、アンさんは大学入学をきっかけにいわゆる通名を使い、同時に周りに「日本人として通す」ようになったことを明かしてくれた。なぜ通名を使うようになったのか。そこに至るまでの経緯を伺っていく。

## ii. 環境の変化・文化的アイデンティティ意識の芽生え

—自分のアイデンティティについて考えるようになったのはいつ頃から？

「小学校卒業するまでは、インターナショナルスクールにいたから、色んな国籍の子とかいたから、あんまり、そういうのは意識しなかった。でも、逆に、中学入ってから、中学から日本の学校行ったんだけど、その中学のなかでは皆日本人だから、そのなかで自分だけ、やっぱ苗字違うし、そうなった時に、結構・・・その時から意識し始めたのかな。あんまり小学生の時はアイデンティティとか、そういうの全然気にしてなくて。でもやっぱ中学入ってから、そういう・・・自己とは何かみたいな（笑）やったりしない？その時にアイデンティティっていう単語知って。それもあったのかも。」

—小学校はインターナショナルスクールで、中学は日本の学校で、高校は K 高校<sup>28</sup>だったよね？そのなかで、意識の変化はあった？

「んー・・・（8秒ほどの沈黙）。周りの環境ってすごい大事だと思ってて。周りの人がどのくらい理解あるかによって、自分は実は日本人じゃないことを言おうという気になるかならないか、みたいなのはすごい差があった。中学の時は・・・中学の時も、あまり人には言いたくなかった。やっぱ、周り皆日本人だし、名前も違うし、皆そういう理解があまり無かったから、あまり言いたくなかった。けど、高校入ってからは結構 K 高校ってそういう理解ある子多いし、在日の子もすごい多いから、結構言っても良いか

---

<sup>28</sup> K 高校には、様々なバックグラウンドをもった生徒が在籍しており、生徒の多くが何らかの海外滞在経験又は、在京外国人で占められている。

なって気持ちはあった。でまた大学入って、普通に日本人の環境だから（笑）『あー、やっぱあんま言いたくないな』みたいな。周りによってすごい、自分の中で波があった。」

アンさんは、小学校から大学まで、国際的な環境→「日本人の環境」→国際的な環境→「日本人の環境」という環境の変化を繰り返し経験した。環境の変化に応じて、自分が在日コリアンであることの「言いやすさ／言いにくさ」にも変化があったと述べている。次に、アンさんの国際児としての経験を更に深く伺った。

### iii.辛かった経験

—今まで、自分のバックグラウンドが原因で辛いことはあった？

「えっと、なんだろう。名前が結構、判断されることがちょいちょいあって。まあ日本人だけに言えたことじゃないかもしれないけど、中国人とか韓国人を結構見下す傾向に、ない？日本のそういう社会だと、見下されてる感じが結構して。なんか、馬鹿にされるじゃないけど・・・なんか、自分の中で一番辛かったのは、その、高校生になって初めてアルバイトに応募しようと思って。で、まず名前とか聞くじゃん？それで普通に、『朴アンです』って言ったら、なんか、その後『じゃあ次いつ面接に来てください』とか、そういう方向に進むかと思ったら、全然なんか、『なに人ですか？』とか『いつ日本来たんですか？』とか『いつまで日本いるんですか？』とか『日本語は大丈夫なんですか？』とか、全部そういう方向に持っていかれて。なんか名前だけで全部決めつけられた気がして、すごいその時。結構・・・衝撃的・・・だったかも。やっぱ、名前だけで全部見られてるんだなあって気がして、すごいその時。」

（泣きそうに声を震わせながら語るアンさん。それを誤魔化すかのように笑い、一瞬うつむく。）

—それを、相談する相手はいた？

「あん・・・まり。自分と同じような境遇の子がいなかったから、ちょっと、言いにくかった。」

アンさんは、「ごめん」と笑って言いながら、上半身ごと後ろに振り返ってしまった。両手で涙を拭っている。ここで語って下さった経験がアンさんにとって本当に辛い出来事だということが伝わる。ここで一度ビデオを止めた。

### iii.社会に対する意識



落ち着いたところで、アンさんの了解を得てインタビューを再開した。そこで、アンさんに日本の社会へ抱く思いを伺ってみた。

—そのような経験を経て、日本社会や日本人マジョリティに怒りとか不満とかを感じたりする？

「・・・(怒りや不満)は、ある。あるね(笑) やっぱ見下されてる感がすごいある気がして。西洋人？欧米人には、日本人が(上から)見られてるって感じが、すごい劣等感っていうのを日本人は感じてると思うんだけど。でもそれが、対アジア人とかになると、その途端になんか上に立たれたような気がして。まあ実際根拠とかは全然ないんだけど、(こちらの)感じ方としては、すごいそういう風を感じる。なんだろ・・・まあ皆そうやって、そりゃもちろん、上に立ちたいというか、下に人がいるって思うと、それは安心する気持ちはすごいわかるけど、すごい・・・結構やっぱ見下されている感じはするかな・・・。」

アンさんは、日本人が西洋人に対して持つ劣等感、他方、他のアジア諸国の人々に対して持つ優越感を、差別を受けた側として現実的に体感していることがわかる。ここでは、日本人マジョリティへも気を遣っていると思われる冷静で客観的な語り口調が印象的だった。

#### iv. 家族

—では、家族に不満等をぶつけたことはある？

「(上を向いて3秒ほど考える) あー、でも家族にはすごいよく当たった・・・『え、なんで帰化しないの？』みたいなのはすごい親に聞く。『帰化して日本人になっちゃえば、全部楽になるのに、なんでそこまでして(韓国人であることを)貫き通そうとするのか』っていうのは、よく言ってた、昔。まあ今でもちょっと言うけど(笑)」

#### v. 利点 (国際児で良かったこと)

—逆に、国際的なバックグラウンドを持って生まれたことに恩恵や利点は感じる？

「自分がそういう経験をしてきたから、あんまり人を『なに人だから』とか『どこで生まれたから』とか、そういうので判断しないようにしてる。そういう、色んな人がいる

んだなっていう理解・・・理解じゃないけど、あんまり差別的な目では見ないようには、して・・・ん？するようにはできる・・・かな？わかんないけど（笑）出来ているかわからないけど。他の人よりかは、そういう問題に関しては、なんだろ、敏感じゃないけど、ちょっと繊細にはなれる、と思います。」

## vi. 故郷

—アンさんにとって、故郷、ホームとは？

「(8秒ほどの沈黙) うーん・・・私は日本で生まれて日本で育って、日本以外の国では住んだことがないから、そりゃもちろん、自分にとってのホームは日本。居やすい？同化しやすい？なんだろ。ホーム・・・かと言って、そこが居心地が良いとは限らないけど、でも自分が長くいた所・・・」

—修学旅行で韓国に行ったよね？その時にはどう思った？居心地は良いと思った？

「んー、正直、居心地は良いとは思わなかった。それは何故かというと、自分が韓国語できないし、ハングル文字とか見ても何一つ理解できないし・・・。居心地が良いかって言われたら、あそこは自分のホームではないなとも思ったけど、自分の血的に見たら、韓国人だから・・・一応・・・うーん、難しい（笑）帰る所はあるのかな？うーん、ここ全部カットで（笑）<sup>29</sup>・・・文字とかは読めないし何も理解できないけど、一応遺伝子的にはそこ（韓国）の人だから、・・・複雑。」

—じゃあ、自分はズバリなに人かと聞かれたら？

「わー、難しいね（笑）なに人なんだろう。（上を見ながら）うーんとね、ちょっと話逸れるかもしれないけど、アメリカに留学中、『なに人？』って聞かれた時に、私は『日本人です』って答えてた。」

—その時、韓国については一切触れなかった？

「一応、国籍は韓国だけど、日本生まれ日本育ちだから、みたいな。もう完全に日本で育ったから、自分は日本人です、みたいな感じで言ってた。」

---

<sup>29</sup> ご本人の了解を得て掲載した。

—じゃあ、国という枠を取っ払って考えた時、どのような人たちという時が一番落ち着く？

「正直、K 高生と居る時が一番楽。K 高生とか小学校の友達とか、色んな背景を知ってる子のほうが、すごい、一緒に居やすい。特に、K 高生とかは、修学旅行で韓国行ったりとかしてるから。わかってくれる人というのが一番楽かな。」

## vii. 言語

—ご両親は、韓国語を話す？

「えっと、母親もずっと日本で育ってきて、ハタチ過ぎてくらいからちょっと韓国語を勉強したみたいなの。ほんとに、第二外国語みたいな感じで、母親にとって、韓国語も。全然そんな喋れない。」

—アンさん自身は韓国語を学びたい気持ちや学ぼうとしたことはある？

「実は今、大学の授業で韓国語の授業取ってて。それも結構不純な理由で（笑）本当は、スペイン語取りたくて。でも、自分の大学の自分の学部でスペイン語が無くて、じゃあ、まあこれを機に韓国語やってみようかなっていう、すごいくだらない動機だけど（笑）一応、今、韓国語の授業は取ってる。」

—じゃあ、今まで韓国語を積極的に学ぼうと思ったことはない？

「ない。小学生の時に、一応親は試みたらしいのね。ちょっと韓国語やらせようみたいな。試みはしたけど、私が完全拒否して。『別にやりたくない』みたいな。全然記憶にないんだけど。」

—それは、やりたくない理由とか・・・？

「そう考えると、その時から、うーん・・・なんだろう・・・『なんでやらなきゃいけないんだろう』みたいな気持ちあったんだろうね。別に日本にいるわけだし、別に韓国語やったところで、別に差はないじゃんって思ってたのかな・・・多分。言語やるんだったら他の言葉やりたいとか、そういう気持ちの方が強かった。だから、K 高校入ってニ外（第二外国語）でスペイン語取ったし。」

—さっき（インタビューの間の休憩時）「アイデンティティの問題から逃げてきた」って言ってたけど、それと韓国語を学ばなかったことは関係があるのかな？

「ある・・・のかもね。もしそこで、うーん・・・（20秒の沈黙）正直、今自分が韓国人かって言われたら、完全にイエスとは言えないのね。で、もしそれが言葉できたら、イエスってなってたのかなって・・・とはちょっと思う。」

—それは、韓国語を学ばなかったことを後悔している？

「後悔はしてない。でも・・・んー、多分もし自分が韓国人だと思っていたなら・・・（沈黙）昔から帰化したいと思ってたから、韓国人にはなりたくないってことなんだろうね。だから言語学習からも離れてたのかも・・・しれない。」

—言語以外で、韓国の文化に特別な感情はある？

「めっちゃね、スポーツの日韓戦とかになるとめっちゃ複雑になる（笑）どっち応援したら良いかよくわからなくなるけど、でもやっぱり応援したいっていう気持ちはあるなあ。」

—それは、韓国を応援したい？

「うん、そうだね、日韓戦になったら、不思議だね。なんか日韓戦だと韓国を応援したくなるかも（笑）よくわからない（笑）」

—K-pop等の韓国文化が流行っているけど、どう思う？

「自分自身は、そんなにそういう韓流ドラマとか K-pop に興味は無いけれど、でもそういうのに興味を持ってくれる人が多いというのは、ちょっと嬉しいっていう気持ちはあるなあ。」

言語に関する質問は、アンさんが最も回答に困った部分だ。韓国語を学習する機会があったにもかかわらず、積極的に習得しようと思わなかったというアンさん。その理由を「韓国人になりたくなかったからかもしれない」と述べた。他方、スポーツの日韓戦では韓国を応援したくなることには、自分でも「不思議」と述べている。「日本人と同じ扱いを受けたい」という欲求と「韓国人としても認められたい」という欲求が混在す

るアンさんの内面が垣間見える。「韓国人になりたくなかった」という意識は、アンさんの積極的な選択というよりも、社会の現実に対して「そう思わざるを得なかった」という方が正しいのではないだろうか。

#### viii. 日本社会（マジョリティー側）に求める変化

—日本社会やマジョリティーにどう変わってほしい？

「んー複雑な背景をもった人たちもいっぱいいるんだよってことを、ちょっとでもわかってもらえたらなって思う。」

#### ix. 国際児へのメッセージ

—国際児としての悩みを抱えている人たちに何か伝えたいことがあったらお願いします。

「なんだろう・・・(笑)んー、自分が・・・話は変わるかもしれないけど、自分が自分に生まれてきた意味って絶対あると思うから、そういう・・・与えられた使命じゃないけど。絶対、こういう境遇で生まれてきたことには理由とか意味があるはずだと思うから、自分をしっかり持つて。」

アンさんはインタビューが終わった後、国際児であることが自分の人生の選択に大きな影響を与えていること、国際児であるおかげで自分と向き合う時間を多く持てたこと、自分と異なる者への想像力を働かせる努力ができることを語って下さった。

#### 国際児② 王さん<sup>30</sup>

王さんとは、3年前に台湾で参加した華僑青年のスタディツアー（冒頭「研究の背景」参照）で出会った。日本に戻った後も、他の当時のツアー参加者ら（日本華僑）と共に、年に数度会う仲である。インタビューは、彼女が通う大学の食堂で行った。

#### i. 自己紹介

—自己紹介をお願いします。

---

<sup>30</sup> インタビュー実施日：2014年10月28日

「えーっと、川崎市で生まれて育って、19年間ここにいる、えー、家では両親、お父さんが台湾でお母さんが中国で、その文化も交えながら暮らしてて。でも、小学校までは普通の公立の小学校通ってたから、そんなに文化の、なんだろ、色んなの混じってるってことを気づかずに暮らしてました。」

—いつもは知らない人にどう自己紹介をしている？

「いつもは、まず最初に名前を言う時点で（姓が）王なんで、ちょっと『ん？』ってなるじゃないですか？それで『台湾人なんですけど、一応日本で生まれて日本で育ってます』っていう紹介から始まりますね。やっぱり名前が違う・・・いつもと違うから、ちょっと違和感持たれたり、『日本語通じるの？』みたいな顔されたりするけど、逆に第一言語が日本語だから、そこは違えますっていう、なんだろ・・・うん、そういう、一応・・・うん・・・そこを言わないと通じない部分があるので、まあそういう紹介から入ってますかね。」

—それは必ず誰に対しても自分が台湾人であることをまず言う？

「説明します。最近、じゃないけど、昔はちょっと抵抗があったんですけど、今は別に堂々と言えるようになったんで、もう『台湾人です！』って。なんか、旅行とか増えたじゃないですか、台湾への。ああいうのがあったから、もう堂々と言えるようになりました。」

—前は、具体的に言いにくい理由があった？

「なんか、ニュースでちょっと中国人なんちゃらとか。事件が多かったっていうのがあったから、ちょっと言いにくかったんですけど、でも今はそんなに嫌悪感を表に出す人少ないじゃないですか。だから普通に『台湾人です』って堂々と言いますね。」

ここでは、王さんが「台湾人です」という部分を本当に堂々とした態度で言っていたのが印象的だった。中国人による犯罪が大きく報道されていた時は、自分のバッググラウンドについて話すことに抵抗があったが、日本人の台湾への旅行が増えたことで「台湾人です」と自信を持って言えるようになったという変化は注目すべき点である。

## ii. 悩んだこと一名前

—自分のアイデンティティについて悩んだ経験は？

「ああ・・・小学校の時にいじめられてたんですよ。多分中国人だからみたいな感じで。で、その時に（なんで日本でずっと育って一緒に生活してるのに、それだけでいじめられるんだろう？）みたいなこと（を考えた）から、『自分って結局なんなんだろう』みたいな・・・考えたこともあるし。なんか、受験の時AO（入試）で入ったんですけど、大学に。自己紹介の欄で何て『説明したら良いんだろう』みたいに考えることは何回かありました。それでも、親とか周り・・・中華学校通ってて、同じように考える人とか、同じような悩みを持つてる先輩を指導した先生とかいたから、一応相談とかして、乗り越えた？かな(笑)」

—今は、アイデンティティについての悩みは無い？

「今はあんまり。学部も学部で、こう、インターナショナルな子が多くて。なんか、全然恥じることもないし、そんな深く悩むこともないかなあって、ポジティブに考えられるようにはなりました。

—他に辛い思いしたことはある？何か言われたとか・・・

「ああ、それこそ小学校でいじめられた時には、『中国人なんだから、中国帰れよ』とか『国帰れよ』とか言われたし。あと、なんだろ・・・『在留カード見せて下さい』とかはちょっと、『うっ』ってなりましたね。夜遅い時とか、ちょっと言われるじゃないですか。なんか『制服着てるけど、遅いのはどうしたの？』みたいな感じで、保険証見せると名前違うから『在留カード持ってる？』とかは、ちょっと・・・差別・・・じゃないけど、（相手は）そういう意識は持ってないと思うけど、勝手にそういう風に思ったことはある・・・ありますね。」

—名前がいやだとか、帰化したいと思ったことはある？

「名前がいやだっていうのは、すごい・・・あって。あの、お兄ちゃんも小学校の時に名前がいじめられてて。私、今アヤっていう本名とは違う名前があるんですけど、これ幼稚園ぐらいから言われてて、他の子にいじめられないために、日本人らしい名前を、一応（本名の）漢字から取ってるんですけど。それで、地元の小学校とか幼稚園の友達には、アヤって呼んでて。その時は、自分がガイジンだっていうことを、隠すくらいの勢いで『アヤです』って自己紹介してましたけど。帰化したいって思ったことは、まああんまりないかな。名前だけですかね。」

—さっき自己紹介する時「台湾人です」と言うと言っていたけど、「中国人です」とは言わない？お母さんは中国人だよ？

「ああ。でも、自分はお父さん寄りなんで(笑) 今なんか台湾と中国の区別みたいなのが付くようになったじゃないですか。そしたらもう、台湾って言っているんですけど。昔はまあ『中国でも、台湾なんだけど・・・』みたいな感じで説明することはあったけど。一応、『パスポート上は台湾だから』みたいな感じで『台湾です』って言ってますね。」

### iii.相談相手

—名前に関する悩み等を相談する相手はいた？

「小学校2年生ぐらいの時に、韓国から来た子がいたんですよ。その子と今でも結構連絡取ってるんですけど。まあ、その子もいわば外国人で、同じようにちょっといじめられてたことがあったから、『今日はこういう人にこんなこと言われてムカついた』みたいな愚痴言い合ったりとかはしてましたね。うん、彼女がいたから、ちょっと、はけ口になったというか、親に子どもながら言いにくいことだったんで、相談できる相手といったらその子でした。」

いじめの件を「親には相談しにくかった」と語る王さん。同じく外国人であることが原因でいじめられていた韓国人の同級生と互いの辛い経験を共有し、大学生になった現在でも連絡を取っているというのは興味深い点だ。

### iv.公立小学校から中華学校へ

—中学から中華学校へ移ったのは、どういう経緯で？

「小学校卒業半年前ぐらいに、お父さんがいきなり、『中華学校ってあるんだよ』って言ってきて。私はなんか、(行ってほしいのかな?)って、お父さんが。お兄ちゃんが中国語とかできなくて。なんか、『やりたくない』みたいな感じだったから、(せめて私にはやってほしいのかな?)って、『じゃあ行く』って言ったんですけど。後日(お父さんに)聞いたら、『いや、あるんだよって話ただけだったんだけど』みたいな(笑) そう、そんな感じで。ノリと勢いみたいな感じで(中華学校に)入りました。」

—入って良かったと思う？



「(頷きながら) うん、良かったと思います。中国語も勉強できたし、差別について、まあ差別じゃないけど、考えることも少なくなったし、相談できる相手もいるし。なんか、すごいプラスの部分ばっかだなんて思いますね。」

王さんの場合、中華学校へ入ったことが、自分自身に積極的な影響を与えた。日本人生徒が圧倒的多数の環境から、自分と同じように中華系の背景を持つ生徒と先生に囲まれる環境に移り、学校で自分が台湾人(中国人)であることについて悩まされる機会がなくなったこと、相談できる相手が増えたこと、中国語が勉強できたこと等が良かったと語っている。冒頭で述べた「台湾へ旅行する人が増えた」というような社会的な要因に加え、中華学校入学後に身の周りに起きた変化も、王さんが自分が台湾人であることについて自信を深める要因になったと考えられる。

#### v. 利点

— そのように生まれたことに利点や恩恵を感じていることはある？

「んー、なんだろう。やっぱり一番大きいのは言語かな。今バイトとかでもちょっと使ったりして、なんか、他の人ができないこと？ができるし、困ってる人を助けることもできるし。っていうことで自分の自信にもなるし、相手を助けてあげられるし、っていうんで、うん。すごい、学んで良かったなって思いますね。」

王さんは、国際児であることの最も大きな利点が「言語」であると述べた。中国語を話せることは、王さんが国際児としてのアイデンティティを自信を持って主張できる大きな理由になっているようだ。

#### vi. 故郷

— 故郷はどこかと聞かれたら？

「故郷は、日本の、神奈川県、川崎です！(笑)」

— では、なに人かと聞かれたら？

「台湾人、とは答える・・・けど。でも、たまに、あの、中国対日本とか、台湾対日本(の試合)だと、なんか無意識に日本応援してたりするんですよ。そういうの考えると(首を傾げながら) どっちなんだろう？とは、たまに思いますけど、まあ、日本・・・

台湾なのかなと・・・『台湾です』とは言いますね、一応。」

—「日本人です」とは言わない？

「うん（頷く）。」

—国という枠は置いといて、一番落ち着ける場所はどこ？

「場所・・・場所で行ったら、中華学校ですかね。同じ境遇の子もいるし。」

ここでは、スポーツの試合で「台湾人ならば台湾を応援するだろう」というような「常識」と「台湾人であるが無意識的に日本を応援している」自分の間に差を感じ、そのことで「台湾人であること」への自信が揺らいでしまう王さんの内面が覗ける。

#### **vii.交友関係**

—今一番仲の良い友達は何？

「仲良い友達は、小学校の時の韓国人なんですけど、あと、中華学校の、えーっと、まあ同じような境遇にあった子と、大学だとアメリカからの帰国子女の子ですかね。その子が一番（よく）話してるから。話しやすいついていうこともあるんですけど。」

#### **ix.日本社会（マジョリティー側）に求める変化**

—これまでの国際児としての経験を踏まえ、外国人差別が残る日本社会に変わってほしいと思う点はある？

「ゼミでもそういうことについてちょっと話してたんですけど、変わってほしいっていうか・・・ちょっと閉鎖的だと思うんですよ、日本が。でも、まあ、どんどん『グローバル化』とかいって色んな国の人を受け容れているところあるんで・・・でもなんだろう・・・大きくなったら実際いろいろ考えれるようになって、外国人でも（差別せずに）受け容れる時はあって・・・小学校の子供は区別がつかないじゃないですか。それを、なんだろう。ちゃんと、教育じゃないけど・・・小さい時から受け容れられるような体制があったら、私みたいにいじめられるようなことはなかったのかな。とは思いますね。」

## x. 国際児へのメッセージ

—自身が経験したように、外国人であることが原因でいじめられている子供がいたら、何と声をかけてあげたいですか？

「とりあえず『堂々として』と言いたいかな。自分、(差別的な言葉を)言われた時に、『もう学校に行きたくない』とか『隠れたい』『人前に出たくない』と思ったんですけど、別に自分が悪い訳じゃなくて、どっちかと言えば、それをわかっていない、言うてる子のほうが悪いと思うから。それは恥じることじゃないし、『堂々としていればいいんだよ』と言ってあげたいですね。」

## xi. 人生への影響力

—国際児として生まれたことが自分の人生に大きな影響を与えていると思う？

「うーん・・・私からしたら、それはスタンダードだから、その他と比べてどうとか思わないけど、でもなんだろう。自分が進む道に、日本だけじゃなくて中国・台湾を柱にして他の国も見えているっていうか。中華学校に入ったのも親の影響が大きいし、今の国際学部に入ったのも親がいたからこそ。いろいろな文化に触れさせてくれたからこそだと思うんで。うん・・・まあ何か役に立つかはまだわからないですけど、こういう道に進んだのも親の影響はすごい強いと思います。」

—さっき「国際児として生まれたことが自分にとってはスタンダードだ」と言っていたけど、では国際児であることが自分の人生に大きな影響を与えているという意識はない？

「うん。生まれもって、もうその状態だったから、他の日本人の親のもとに生まれてきた子たちの感覚は正確にはわからないけど。うん・・・だから、私にとっては、親、まあ、台湾と中国の親のもとで日本で育ったというのは普通のことっていう考えは、すごいあります。うん・・・特別なことだとは、そんなに思っていないですね。」

私が王さんへのインタビューのなかで一番印象に残っているのが、この部分だ。「台湾人と中国人の両親をもって日本で生まれ育ったこと」が自分にとっては「スタンダード」であり、他人が思うように特別なことではない。日本人の両親をもって日本で生まれ育った人たちの人生を経験したことは、勿論ない。だから、国際児である自分と国際児でない人たちの人生を比べて、国際児であることが自分の人生に与えている影響力を

測ることはできない。国際児にとって国際児であることは、まさに「私は私である」というアリストテレスの「同一性（アイデンティティ）の原則<sup>31</sup>」のとおり、自明であるが故に最も基礎的であり、行動の選択や思考といった生き方の土台になっているのだ。

### 国際児③ ハナコさん<sup>32</sup>

ハナコさんとは、互いの共通の友人を通じてこの日初めて会ったのだが、インタビュー後も互いの国際児としての経験について1時間ほど会話を弾ませた。初対面同士で、さらにバックグラウンドが異なるとしても、似たような経験や問題意識があり、打ち解けやすいというのは国際児の特徴である。カメラを意識して緊張しているハナコさんにも、まずは自己紹介をして頂いた。

#### i. 自己紹介

「佐藤ハナコ・アリサといいます。お母さんがカナダ人で、お父さんが日本人で、生まれたのは日本で、でもあの、父の会社の都合で（生後）3か月くらいでアメリカに行っ、カナダじゃないんですけど、そこ（アメリカ）で5年間暮らして。5歳の時かな？に、日本に戻ってきて、それからずっと日本です。でも、アメリカにいる時も日本人学校みたいな幼稚園に行ったんで、日本語も喋ったりとかして、で、結構日本人寄りだと思います(笑)」

#### ii. 言語環境

— 家庭で使うのは何語ですか？

「家庭では・・・日本語ですね。あ、そう。私、母が、小学校6年生の時に亡くなったんですね。それまでは、あの、母とだけ英語だったんですけど、今は完全に日本語ですね。」

— 小さい頃は何語がメインでしたか？

「小さい頃は・・・えーっと・・・そうだな・・・アメリカにいた頃は、たぶん英語がメインだったと思いますね。5歳まで。うん、でも、5歳・・・4、5歳ぐらいからは、日本語のほうが、家では日本語のほうが、やっぱり強くなってますかね。はい。」

---

<sup>31</sup> 田丸徳善(1998)、前掲書、pp.6-7

<sup>32</sup> インタビュー実施日：2014年11月4日

—アメリカにいた時の記憶はありますか？

「あんまり無いんですけど・・・でも、日本人学校にいたので、なんか日本人の友達が結構いた気がしますね。日本語喋ってたのかな？(笑)」

—では、その時から日本語と英語両方使ってた？

「両方、たぶん使ってました。親も両方覚えさせようとしてて。父親とは日本語、母親とは英語、みたいな感じで。」

—両親はお互いに何語で話していたのですか？

「英語・・・かな。お母さんが、あの、日本で働いてお父さんと出会ったんですけど、お母さんも日本語ちょっとわかったので、日本語もちょっと喋ったりしてたんですけど、やっぱりお母さんのほうが片言で、お父さんのほうは英語結構喋れたので、英語が多かったです。」

—ご兄弟は？

「えっと、兄と姉がいて、で、あの、兄と姉も同時にアメリカに（父の）転勤の時に行ったので、兄と姉は小学校アメリカにちょっと行ったので、私よりも英語が得意というか。英語を小さい頃よく喋ってて、今でも私より英語得意です。」

—お兄さんやお姉さんと話すときは何語ですか？

「日本語です。」

—今自分のなかでベースの言語はどっち？

「ベースの言語・・・は・・・うーん、どうだろ・・・ま、日本語のほうが・・・よく喋れるかなあって・・・思いますね。英語といっても、お母さんとの会話だけの英語なので、そういう、小さい子の言葉？は、確かに、こう・・・頭の中で喋ってる時に、英語でモノを考えてるってこともあるんですけど、でも、やっぱり日本語のほうが多いですね。すみません、曖昧で(笑)」

—いえいえ(笑)5歳までアメリカで、その後はずっと日本の公立の学校に通ったのです

か？

「そうですね。小学校からずっと。はい。」

—アメリカから日本の学校に移って、周りとの文化の差を感じたことはありますか？小さい頃だからあまり覚えてない・・・？

「そうですね・・・そんなに、まあ・・・親が外国人っていうのは、ちょっと（感じる時が）あったんですけど・・・なんか、こう、小学校に親が来たりするじゃないですか、後ろに。ああいう時に『目立つなあ』みたいなのはあるんですけど(笑)でもまあ、自分自身はそんなに、ギャップは、まあ小さかったので感じてなかったかもしれないですね。」

—お母さんが学校に来て目立つのは、いやではなかった？

「そうですね、やっぱり、ちょっと人と違って目立つのは『恥ずかしいなあ』っていう時もあったし。あとあの服装とか？小さい頃って親が選んだ服きるじゃないですか。服装がちょっと、日本人ぽくない時に、確か周りに『なんか違うね』みたいに言われるのはすごい、いやだった気がします。なんか、目立たないようにしてました(笑)」

—自分が？

「はい。私は。でも、兄と姉は目立ちたい性格で、ちょっとそこは違うかもしれないです。」

—へえ。お兄さんとお姉さんは、そうなんだ。

「結構、注目してほしいって感じなんですよ。私すごい、あの、多分、その・・・日本・・・なんか兄と姉は小学校の時アメリカである程度教育受けたからなのかもしれないですけど、私より結構オープンな感じで。私すごい、なんか、なんですかね、恥ずかしがり屋というか(笑)」

小学校の大半をアメリカで教育を受けた兄と姉が「目立ちたい性格」である一方、自身は「恥ずかしがり屋」で「目立たないようにしていた」という兄弟間の性格の差異は興味深い点だ。

### iii.名前

—アメリカやカナダでは皆に何と呼ばれている？

「ハナって呼びますね。私、ハナコって名前なんですけど、あの、親がその、英語でも呼べる名前、カナダのおばあちゃんも呼べる名前っていうことで、ハンナってあるじゃないですか。日本語ではハンナ、英語の発音でいうと **Hanna** なんですけど。あれが私の、おばあちゃんとかに呼ばれる(名前)。お母さんにもそういう風と呼ばれてて。で、字に書くとハナだけど、呼ばれる時は **Hanna** って呼ばれてて。アリサは言ったことないですね。」

—日本ではアリサって呼ばれてるけど、海外の知り合いからは **Hanna** と呼ばれているということですね？

「そうですね。日本でも、ハナちゃんとかハナって呼んでる人もいるんですけど。最初、アリサって(呼ばれるの)・・・なんか違和感あったんですけど、『アリサっぽい顔？(と言われて)何それ？』って感じだったんですけど(笑)」

—アリサと呼ばれることに結局納得はしたんですか？

「うん・・・なんかそっちのほう呼びやすいっていうか、覚えられやすいんだなと思って。アリサって呼ばれるようになってやっと、『ああ自分からもアリサを付けて自己紹介しよう』って思って。それまではアリサ付けてなかったんですけど、たまたま授業とかで『佐藤ハナコ・アリサさん』って呼ばれて、(アリサまで言ったよ、この人)って思ったら、友達が『アリサちゃんアリサちゃん』て呼んできたから、(そっかあ)って。」

(ハナコさんは、中学時代までミドルネームの「アリサ」を名乗っていなかった。中学の卒業証書の名前に「アリサ」が記載された時、友達からは「かっこいい」と言われたそう。現在はフルネームを名乗る際に「アリサ」と「ハナコ」の両方を言っている。)

ここから話は、外国人の名前でテレビで活躍するタレントの話題へと移った。

「最近ハーフの人テレビにめっちゃ出てますよね。それはどうなんだろうって思うんですけど。なんか、『ハーフを売りにしてる』感じが。売り物？なんか、商品？あえて外国人の名前で・・・自分が純粋な日本人ではないことを、やっぱり主張したい気持ちが

あるから、ですよ。」

#### iv. 「なに人？」という質問について

—ハナコさん自身は、自分のバックグラウンドを周りに知ってほしい気持ちはありますか？

「それは、知ってもらいたいですね。やっぱり初対面で会ったら、必ず『カナダと日本のハーフです』とは絶対言いますね。」

—それは昔からずっと変わらず？

「ずっとですね。」

—それは何故？

「うーん・・・まあ、聞かれることが多いから。『ハーフ？』とか。大学入ってからは、国際系の大学だからかもしれないですけど、私を完璧な外国人だと思う人が結構多くて。あの、留学生だと思って、すごい頑張って『留学生と交流しよう』って来る人がいるんですよ(笑)たまたま。最近では、あまりなくなっただけ。一年留学したんですけど、カナダに。親の故郷に住んでみたくて。1年間だけ、大学の後期から行ったんですけど。それから帰って来た時に、やっぱり服装とかも結構向こう寄りになってたから、やっぱり『留学生ですよ？』って言われたりとか、あと『ハロー！』とか。国分寺で買い物してて、おばあちゃんに『ハロー！ウェア・アーユー・フロム？』とか言われて(笑)可哀想だから、とりあえず『カナダ』って言ってあげるってこともありました(笑)」

—その時は、本当のことは言わなかった？

「いや、カナダ人のフリしましたね、それは。なんか、一生懸命英語で言ってきたから。うーん、でも言う時もありますよ。バイトで私、パン屋さんのレジやってるんですけど、お客さんで『君は日本人か』って言う人いるんで、『なに人？』とか『アメリカ人？』とかやっぱり聞かれるんですけど、『カナダと日本のハーフです』と言いますね。」

—「なに人？」と聞かれたら、戸惑うことはありますか？



「そう聞かれたら、『カナダと日本のハーフ』って言います。」

—日本人とカナダ人どっちかには限定できない？

「そうですね。『両方』って言いたいですね。」

#### v. 「ハーフ」という呼称について

—「ハーフ」という呼び方についてはどう思いますか？

「小さい頃に、母に『自分のことをハーフって言っちゃだめだよ』って言われてました。『ダブルって言いなさい』って言われてました。ハーフだと『50%しか受け継いでいない』とか『半分しかない』っていうイメージがあって、不完全な感じになっちゃうので、どうしても日本人から見ても『半分あの人日本人じゃないから』ってなってしまうので。『ダブル』って言うと『二つある』っていう、そういう（イメージ）。」

—自分を紹介する時は「ダブル」ではなく「ハーフ」と言う？

「そうですね。ダブルと言うと、わからない人が結構いるので。ハーフって言葉を皆使い慣れているので。」

—「ハーフ」という言葉に抵抗感は？

「ないですね。」

—相手がわかりやすいほうが良い？

「そうですね。」

#### vi. 「親の故郷」への留学

—さっき「親の故郷（カナダ）に住んでみたかった」と言っていたが、そう思ったきっかけはあったのですか？

「大学に入って、うーん、そうですね、大学がもうちょっと楽しいところだと思っていたので(笑) 辞めなくなっただけですね。で、(大学を) 辞めようと思ったんですけど、あ

の一・・・ずっと日本にいるから、将来日本で働くか、それともカナダで働くこともできるなどと思って。で、結構・・・親戚に会いにカナダに行っているの、カナダの会社見に行ったりして、雰囲気何となくわかっていたので、そっちのほうが楽しそうだと思って。カナダでもし働くなら、カナダの学校に行こうと思って、日本の大学辞めてカナダの大学に行こうかなと思ってたんです。でも、辞めるのに親が反対して、『それだったら1年間（留学に）行って、雰囲気を見てきて』と言われて、行ってきました。」

—留学はどうでした？

「クラスメートが全員移民で、私だけカナダの国籍持っている人で、歳は皆仕事を探しに来ている人だったので30代が多くて。移民クラスなので『なに人』とかは全然関係ないというか。皆で同じ事勉強して。行って良かったと思います。すみません、曖昧で(笑)」

—カナダへは留学以前もよく行っていたのですか？

「高校生ぐらいまでは毎年の夏休みとかに、おじいちゃん・おばあちゃんに会いに行ったりしてました。」

—では、カナダが好きで、カナダへ学びに行きたいという気持ちだったのですか？

「(頷きながら) 好きですね。」

## vii. 悩んだ経験

「日本人とカナダ人どっちでもであることは、すごいラッキーだなんて思って。でも、大学に入って、なんか色々・・・勉強したり、その、ハーフのことについても勉強したし。友達から色々質問されたりとかして。1年生の時に『(国籍が) 二つあるのずるい』って言われたんですよ。・・・それちょっと傷ついたんですけど。」

—傷ついたんですか？

「あの、(授業で) 『二重国籍を認めるべきだ』みたいな発表をしたんですね。でも、あんまり私の・・・たぶん・・・説得力が無かったんですけど、そしたら、あの、最後のコメント貰うところで周りの子に、なんか・・・『ずるい』とか『やっぱりどっちか選ぶべきだよ』みたいな、『そういう曖昧なの良くないよ』とか(言われた)。そう言われ

ると、すごい、『わかってないな』って感じがして。」

—ほかに他人に言われてショックだったことはある？

「ショックだったというか、ちょっと、そうかなあと不思議に思うのは、ちょっとした私のする事？すごい簡単な・・・私、ごはん食べる時に『三角食べ』ってあるじゃないですか。順番に（おかずを）全部食べるみたいな。『三角食べ』ができないんですね。それ、ただ私の、習慣が悪いんですけど、『あまりできないんだよね』って話を友達にして、『そういうとこ、やっぱ外国風なんじゃん？』って言われると、『え、そうなの？』って思って、『関係なくない？』と思うんですけど。そういうのとか・・・なんだろう、ちょっとした・・・バイトで、うーん・・・バイトでお金の扱いとか、こう・・・日本の、ステレオタイプなんですけど、日本の女の子すごい丁寧にお札を揃えているのを、私が結構雑にやってたら、『そういうとこやっぱアメリカっぽいよね』とか言われて。なんか、いや、アメリカじゃないし、みたいな(笑)」

—そういう時、どう反応する？

『いや、そういうの関係ないですよ』って言うかな。最近バイトの打ち上げで焼き肉食べ放題行ったんですけど、『食べ方がアメリカ人だよ』と言われて。『日本人もこれくらい食べます』って言って、ちょっと怒ってたら、隣にいた純日本人の後輩が私より食べてくれて、なんか、すごい、なんだろう、(気を使ってくれたんだなあ)って思ったんですけど(笑)」

—やっぱり所々で「外国人扱い」されることが多い？

「されますね～。やっぱり見た目が、結構、ガイジンなので・・・日本語喋るとびっくりした顔する人いますからね。」

## ix.外見

—見た目で逆に得したことはありますか？

「小さい頃は、ハーフというだけで「ガイジン顔」って皆かわいいって言うじゃないですか。だから『ハーフいいな。羨ましいな。かわいい。』って皆言うんですよ。それは、小さい頃は多分ラッキーだと思っていたんですけど。でも・・・なんか・・・「ガイジン顔」なんですよ、すごく(笑)」

—今は「いいな」と言われたら、どう思っている？

「んー『いいだろう』って思うかもしれない(笑)」

#### x. 相談相手

—そういった悩みや経験を共有する人はいる？

「姉に。姉とか、すごい近い幼馴染とか。」

#### xi. 故郷

—故郷はどこかと聞かれたらどこと答える？

「それ前も聞かれたことあるんですよ(笑)『ホームはどこか』ですよ。たぶん『どっちも』って言いますね。日本もカナダもどっちも。」

—アメリカは？

「アメリカはあまり覚えてないから・・・その町？その町がもしかしたら故郷と言えるかもしれない。あまり深く『ここが故郷！』というのは無い。『どっちも』という感じ。」

—では、どこでも生きていける？

「どこでも生きていけますね。『いきたい』と思いますね。それも、私ハーフで得したなと思ったのが、あの・・・どこにいてもハーフってガイジンじゃないですか。だから、日本にいてもガイジン扱いされるし、カナダに行っても私カナダ人に見えないので、アジア人にも見えないんですけど。イスラム系って言われるんですけど、なぜか。でも、なんか、そうですね。どこの国に行ってもガイジンに見えちゃうので、ということは、どこに行っても同じように私は受け容れられて生活できるんだなって思うと、どこでも住めるから、(ハーフで)良かったなって思います。」

—なるほど。

「兄がオペラ目指してて、ドイツに住んでるんですね。結構、兄の影響なんですけど、

兄もそう言って。やっぱり・・・『なに人』というのに囚われないのが（ハーフでいて）ラッキーかもしれない。」

ハナコさんへのインタビューでは、この部分の語りが最も強く印象に残った。「どっちつかず」或いは「どこに行ってもガイジン扱いされる」状態と聞けば、それが国際児であることの難点だと想像してしまいがちだ。しかし見方を変えれば、そうだからこそ、どの環境にも馴染める力をもっているとも言える。国際児の混合する文化的アイデンティティの利点と難点はまさに表裏一体だということがわかる。

## xii. 将来

—将来はどこで活躍したいですか？

「日本じゃないところに行きたいんですけど、どこがいいかなあと考えて。色んな国見て決めようと思っていて。この間は、ちょっと東欧を一人旅してきたんですけど。でも、まだフランスとかそっちは行ったことないし、色々行ってみたいんですけど。わからないですね、まだ。でも、日本に一生いるとか、カナダに一生いるということはない。色々な場所を転々としたいなって思ってますね。」

## 13. 国際児へのメッセージ

—ハーフで外見等が原因でいじめられる子供もいると思うのですが・・・

「私の場合そういうことがラッキーなことに無かったから・・・私は、すごい得したと思ってるし・・・いじめられるのも人と違うからなんですけど、人と違うって、すごい良いことだし、それに気づけたらいいなと思うんですけど。やっぱり小さい子だと、私も小さい頃、確かに『目立ちたくない』と思ってたので。でも親にずっと『特別だよ』とか『両方（の文化を受け継いでいる）だよ』って言われてたので、そういう風に周りも言えたら良いなって思います。」

## 14. 社会に求める変化

—国際児を受け容れる側の社会に変わってほしいと思うことはある？

「私の・・・友達とかは結構、私のことを区別なく、フツーに接してくれるんですけど、初対面とか、バイト先のお客さんとか、そういう人とかは、やっぱり見た目ですね、最初

入るので・・・なんだろうな・・・話してて、バイトの上司とかも『わかりあえない』と向こうが思っちゃってる時が、そういう時に寂しいなあって。私もともと日本語があまり達者じゃないので、それ・・・それをハーフ（であること）のせいにしちゃって、相手も、なんか『はい、はい』みたいな。『またなんか変なこと言ってる』って言う時とか。『日本とちょっと考え方そういうとこ違うから。ここ日本だから』とか、そういう時たまにあるんで、そういう時は・・・うん・・・」

—寂しい？

「そうですね、寂しい・・・なんか、なんですかね（首を傾げる）。私、ずっと日本で育ったので、なんも変わらないはずなんだけどなあって。」

—バイト先の方はハナコさんのハーフである部分を大きく見ている？

「大きく見ている人もいますね。・・・そういう人には、私も壁作っちゃうし、なんか向こうから壁作られている感じがすごいするので・・・なんか『外の人』って見られるので。なんか、そういう人には・・・その・・・私も心を開けないというか。えっと、質問なんでしたっけ？(笑)」

—そういう人たちに言いたい事はありますか？

「さっき、友達に、このインタビューの前に聞いたんですけど、『全然、日本人』って言われて。全然・・・変わったところ？『違い無いよ』って言われて。そう言われてホッとするんですけど、でもハーフであることを自分で『良い』って思ってるっていうのは、すごい矛盾してますよね？」

—うーん・・・そうですか？

「カナダというのも主張したいんですけど、でも・・・あの・・・主張したいけど、日本人扱いされるほうがホッとするというか・・・」

—カナダではどうですか？

「カナダでは・・・うーん・・・わかりません。」

—カナダで「外国人扱い」されて嫌だった経験は？

「なんか・・・良い意味で。その・・・『この子は半分日本人だから礼儀正しいんだよ』とか『パソコンに詳しいんだよ』とか、そういうことは言われましたけど、なんか、いやって思うことはなかった。まあ1年しか住んでないんですけど。」

ここでは、何かにつけて「ハーフだから」と言われることや、日本で育ったにもかかわらず「外国人扱い」されることへの戸惑い、ゆえに「日本人扱い」されることへの安心感と、だが同時に自分の中のカナダの要素も知ってもらいたいという欲求が混在するハナコさんの心情を知ることができる。

## 15. 居場所

—ハナコさんが最も落ち着ける場所はどこですか？

「自分だけこう、違う・・・特別扱いされない場所？かな。友達は私のことそんなに、あの、ガイジンって思っていない人たちなので。あとは家族とか。あとやっぱり外国にいる時とか、空港にいる時とか。あんまり自分がスタンドアウトしない？ところ？あ、結局そうですね、目立ちたくないって感じになってますね(笑)」

インタビューが終わってから、実は本インタビューを受けるかどうかとても悩んだことを明かして下さった。その理由も「観察対象になるのはいやだ」という気持ちがあったからだと言う。しかし、インタビューをする側の筆者もハーフだということを知り、「相手もハーフなら特別扱いされることなく、心開けると思った」そうだ。全体を振り返ると、ハーフだからという理由で特別扱いされることに違和感を感じ、自分という人間をみてほしいというハナコさんの気持ちが終始感じられるお話であった。

## 第4章 インタビューから得た考察—ナラティブ分析

以上三人の国際児による語りは、それぞれにその人「らしさ」が表れている。人間が一人ひとり異なっているのと同じで、国際児も当然一人ひとりが異なる人生を歩み、異なるアイデンティティを形成している。本稿では三人の国際児にお話を伺ったが、これが10人、100人になっても、誰ひとりとして同じ語りをする国際児はいないはずだ（例えば全員が同じ文化的・民族的背景を持っていたとしても）。したがって、本稿のインタビューで明らかになった三人の国際児の経験や意識、文化的アイデンティティの形成要素等が、他の国際児にも当てはまる可能性もあればそうでない可能性もある。例

えば本稿の三人の場合、マジョリティー社会に対して共通の欲求を持っていた。日本に暮らす国際児で三人と同じ欲求や問題意識を持つ者は多いかもしれないが、必ずしも全ての国際児がそうであるわけではない。そのような点を再度確認した上で、ここからはインタビューを振り返り、国際児のアイデンティティを理解するために重要と思われるナラティブを抜粋、考察する。

#### 4-1. 国際児であるということへの意識

国際児は自らが国際児であることをどのように思っているのだろうか。

##### (1) 国際児であることを他者にどのように伝えるか

三人にはインタビューの冒頭に必ず自己紹介をお願いし、必要に応じて「国際児であることを周囲に知ってほしいと思うか？」という質問をした。人との関係において自分の中にある複数の文化をどのように位置付けているかを知るためだ。

韓国人の両親のもと日本で生まれ育ったアンさんは、国際児であることを「隠そうとしている」「あんまり大っぴらに自分の背景をそんなに言おうとは思わない」と答えた上で、自分と同じコリアンの人には『「実は韓国人なんだ』って言う』と述べた。日本人には「日本人として」、韓国人には「韓国人として」自らを紹介する。

川崎で生まれ育った台湾人の王さんは、初対面の人には必ず『「台湾人なんですけど、日本で生まれ育ってます』っていう紹介から入りますね』と答えた。名前で日本人でないことがわかることと、あらゆる誤解を避けるためだ。昔は台湾人であることを言うのに抵抗があったが、近年台湾への旅行者が増えていることや中国語が話せる自信もあり、「もう堂々と言えるようになりました」と語った。

日本人の父とカナダ人の母に生まれたハナコさんは、「自分のバックグラウンドを周りに知ってほしい気持ちはあるか」という質問に「それは、知ってもらいたいですね。やっぱり初対面で会ったら、必ず『カナダと日本のハーフです』とは絶対に言いますね。」と答えた。その外見から、自分が言わなくても相手に「ハーフか」と聞かれるため、また留学生である等の誤解を避けるためでもあると述べた。

##### (2) 国際児であることの利点

アンさんは、「他の人よりかは、そういう問題（差別問題）に関しては、なんだろう、敏感じゃないけど、ちょっと繊細にはなれる、と思います。」と述べた。自分の選択ではどうしようもならない、生まれ持った境遇について、自ら傷つけられた経験があるからこそ、他人の「傷つきやすさ」にも思いを致すことができるのだろう。また同じ理由で、自分と向き合う時間を多く持てたと自負している。

王さんは、複数言語を習得できたことが国際児として最も大きな利点であると考えている。「自分の自信にもなるし、相手を助けてあげられるし」と語った。



ハナコさんは、どこにいても同じように受け容れられ、「なに人」ということに囚われずに生きていけることが、国際児でいて「ラッキー」なことだと考えている。

三人が考える国際児としての利点は、どれも異なっていて興味深い。ここで注意しなければならないのは、国際児には「良いこと」「悪いこと」だけがあるのではないということだ。国際児であることは、マジョリティが経験しないような困難（難点）と恩恵（利点）の両方を得るといふことなのである。

### （3）海外志向

本稿の対象である三人に明らかに共通するのは、海外志向を持っている点である。偶然か必然か、三人とも現在、大学でグローバル社会学の分野を学んでいる。また、アンさんとハナコさんは留学経験があり、王さんは今後、父の故郷・台湾への留学を計画していると述べていた。

「自分が進む道に、日本だけじゃなくて中国・台湾を柱にして他の国も見えているってどうか。」（王さん）

「日本に一生いるとか、カナダに一生いるということはない。色々な場所を転々としたいなって思ってますね。」（ハナコさん）

以上のような語りからも、国際児は、日本以外の国で学ぶ、暮らすという選択肢を能動的に持ちやすい傾向にあるといえるだろう。

## 4-2. 文化的アイデンティティ

デビッド&ルースにおいて、次のような ATCK（アダルトサードカルチャーキッズ）へのアンケートの回答が紹介されている。

TCK として育ったことで世界を故郷のように感じるようになり、外国や異文化という新しい状況や新しい人々に接しても自身を持ってやっていけるようになった。しかし、いいことばかりではない。（省略）私が答えに詰まる質問は「どこから来たの？

もともとはどこの人？」だ<sup>33</sup>。

日本で生まれ、日本で成長期の大半を過ごし、日本国籍を持つ者が、例えば海外で同じ質問をされたら、何の思いをめぐらせることなく「日本」と答えられるだろう。しかし国際児の場合、その質問に対する答えをもたない人もいる。また、それぞれの考えや経験によって「故郷」「なに人」という言葉の持つ意味に差が出るため、その答え方は多様であり、その時々で回答が変わる可能性がある。

---

<sup>33</sup> デビッド・C.ポロック&ルース＝ヴァン・リーケン（2010）、前掲書、p.159

### (1) 自分はなに人か

「なに人か」という質問にアンさんは直接的な回答は避け、「アメリカに留学中、『なに人?』って聞かれた時に、私は自分は『日本人です』って答えてた」と述べた。日本で生まれ育ち、韓国語は一切話せないということもあり、日本でも海外でも周りに対しては日本人として振る舞っている。しかし、別の質問では「文字とかは読めないし何も理解できないけど、一応遺伝子的にはそこ（韓国）の人だから、・・・複雑」と語っているところから、本当のところは「日本人」と言うことにも100%納得しているわけではない様子だった。

王さんの場合、「昔はちょっと抵抗があったんですけど、今は別に堂々と言えるようになったんで、もう『台湾人です!』って。なんか、旅行とか増えたじゃないですか、台湾への。ああいうのがあったから、もう堂々と言えるようになりました」と語っていた。その語り方に迷いは感じられなかった。王さんとアンさんは、日本で生まれ育った「在日外国人」という共通点があるが、この質問に対する二人の回答の仕方には明らかな差があった。

ハナコさんは、「なに人か」と聞かれたら、戸惑うことなく「そう聞かれたら、『カナダと日本のハーフ』って言います」と答えていた。日本のカナダのどちらか一方ではなく、『両方』って言いたいですね」と付け加えた。

### (2) 故郷

「故郷はどこか」という質問に、アンさんは数秒の沈黙の後「日本」と答えた。アンさんにとって、その故郷とは「居心地が良いとは限らないけど、でも自分が長くいた所」である。「なに人か」という質問同様、アンさんにとっては難しい質問だったようだ。それでも留学先のアメリカでは「国籍は韓国だけど、日本生まれ日本育ちだから、みたいな。もう完全に日本で育ったから、自分は日本人です、みたいな感じで言ってた」というのは大変興味深い。

王さんは迷わず、自身が生まれ育った「日本の神奈川県の川崎」と答えた。そこ以外はないと思っているような印象を受けた。王さんの中で、自分は「川崎を故郷に持つ台湾人」というアイデンティティが確立されているようだ。

ハナコさんは、「たぶん『どっちも』って言いますね。日本もカナダもどっちも」と答えた上で、「あまり深く『ここが故郷!』というのは無い。『どっちも』という感じ」と付け加えた。そこから、「どこでも生きていける」という話へと繋がった。ハナコさんは、「なに人か」「故郷はどこか」というどちらの質問に対しても、日本とカナダの両方と答えている点が興味深い。

### (3) 居場所

「どのような人たちといる時が一番落ち着くか」という質問に対し、アンさんは、「わ

かってくれる人というのが一番楽」と答えた。これは誰にとっても同じことであるが、アンさんにとっては、自身の国際的なバッググラウンドや複雑な文化的アイデンティティについて理解がある人という意味だろう。具体的には、小学校（インターナショナルスクール）と高校（K 高校）の同級生であると回答している。前述のとおり、TCK にとっては、必ずしも地理的な場所が故郷を意味するわけではなく、故郷の定義が「人との絆」に取って代わる場合もある（デビッド&ルース）。アンさんの語りから、国際児の「居場所」についても同じことがいえるだろう。

王さんには「一番落ち着ける場所はどこか」と尋ね、「場所で言ったら、中華学校ですかね。同じ境遇の子もいるし」と答えた。また、「一番仲の良い友達は何？」という質問には、小学校時代の韓国人の同級生、中華学校の同級生、アメリカからの帰国生である大学の同級生と答えた。アンさんと王さんにとって、自身の国際的なバッググラウンドを理解し、受け入れ、時にはそのことについて語り合える他者との「絆」や「信頼」が重要であることがわかる。そして、二人はそのような人たちの関係において「居場所」を持つと言うことができる。

ハナコさんは、「自分が特別扱いされない場所」「外国にいる時とか、空港にいる時とか。あんまり自分がスタンドアウトしないところ」と答えた。

それぞれが語る「居場所」は異なるが、つまり三人にとって居心地が良いと思える場所とは、自分自身が国際児であることを人との関わりにおいて「自然」と思える場所、「〇〇人である」という枠を超え「人としての自分」を評価してもらえる場所なのではないだろうか。

### 4-3. 文化的アイデンティティの形成要素

ここからは、三人の文化的アイデンティティの形成に影響を与えた要素を、語りの中から出来る限りで推察する。

#### (1) 学校環境

アンさんは自身の経験から、学校環境の重要性を指摘した。インターナショナルスクール（国際的な環境）→私立女子校（日本的な環境）→K 高校（国際的な環境）→日本の大学（日本的な環境）という学校環境の移動に伴い、「自分は実は日本人じゃないこと」の周りへの「伝えやすさ/伝えにくさ」に大きな程度の差があったと語っていた。日本的な環境にいる時は、自分が在日コリアンであることを肯定的に思えず「隠したい」という思いが先行する。一方、国際的な環境では「言っても良いかなって気持ち」になる。

王さんは日本の公立小学校から中華学校へ進学した。そこで「同じような悩みを持つ先輩を指導した先生」や「同じような境遇にあった子」と学校生活をともにし、中国語を習得した。このことは、王さんの国際児としてのアイデンティティを肯定的で安

定的なものにした大きな要素になっていると予想できる。

## (2) 言語

先行研究（マーフィー重松、鈴木一代等）は、国際児が国際児としてのアイデンティティを自信をもって主張できるようになるには、自分の背景にある複数の文化と言語を習得する必要があると示している。本稿の研究対象者三人に関して言えば、それは正しい見解だといえる。

ハナコさんは、英語と日本語が話せ、自分をカナダ人と日本人の両方だと位置づけていた。王さんも、中国語と日本語を両方話し、日本で生まれ育ちながらも自分をはっきり台湾人であると位置づけていた。また、中国語を話せることは「自分の自信にもなる」「困ってる人を助けることもできる」と語っていた。他方アンさんの場合、幼い頃に韓国語を学ばせようとした親に対して「完全拒否」した経験がある。「正直、今自分が韓国人かって言われたら、完全にイエスとは言えないのね。で、もしそれが言葉できたら、イエスってなってたのかなって・・・とはちょっと思う」「昔から帰化したいと思ってたから、韓国人にはなりたくないってことなんだろうね。だから言語学習からも離れてたのかも・・・しれない。」と語っていた。

では、国際児は複数言語を習得していれば必ずしも肯定的で安定的なアイデンティティを形成できるのだろうか。複数の言語を習得しているがゆえに「自分はどこに属するか」と悩んでしまうケースもあるかもしれない。しかし、それでも言語と文化的アイデンティティの間には深い関わりがあることは確かである。

## (3) 所属文化への親しみ

言語同様、所属文化への親しみ度、或いは興味、愛着も文化的アイデンティティの形成と無関係とは言い切れない。所属文化への親しみが文化的帰属感を形成するのか、文化的帰属感が所属文化への親しみを生むのか、その順番は個人によって異なるだろう。

アンさんは、高校の修学旅行で韓国へ行った時のことについて「正直、居心地は良いとは思わなかった」と語った。また、**K-pop**等の韓流文化の流行について「自分自身は、そんなにそういう韓流ドラマとか **K-pop** に興味は無いけれど、でもそういうのに興味を持ってくれる人が多いというのは、ちょっと嬉しい」と語っている。王さんは、6年間中華学校に通っていたこと、小・中学校時代は1～2年に一回は台湾を訪れていたことから、台湾文化に親しみをもってきたことが推測できる。ハナコさんは、カナダへ「高校生ぐらいまでは毎年の夏休みとかに、おじいちゃん・おばあちゃんに会いに行ったりしてました」と語っていた。また「親の故郷に住んでみたかった」、カナダが「好き」という語りからも、ハナコさんがカナダに親しみを抱いていることが伝わる。

## (4) 差異化された経験

アンさん、王さん、ハナコさん、いずれにもマジョリティ社会から「外の人」（ハナコさんの言葉）として扱われ、それによって差別されたり、排除された経験があった。

アンさんは、高校生になり、初めて電話でアルバイトに応募した際、名前が原因で辛い経験をした。そのことを思い出し、人に話すとき涙が出てしまうほど、それはアンさんにとって「衝撃的」な出来事だった。しかし、彼女はそのように排除されても、それによって自分を韓国人と位置付けることを選んでいない。むしろその後、名前を通名に変え、他人との関係において「日本人として」生きることを選んだ。そうすれば、名前だけで自分という人間を判断されることがなくなるからだ。ここに彼女の選択の主体性があると言えるが、それは在日コリアンとしての生きづらさに依拠するものであったことを忘れてはいけない。

王さんも名前が原因で兄がいじめられ、自身もいやな思いをしたことがあった。夜遅い時間に警察に声をかけられ、保険証を見せると、さらに「在留カード持ってる？」と聞かれたことに傷ついた。幼稚園の時には「他の子にいじめられないために、日本人らしい名前を」使っていたという語りもあった。小学校では、「中国人だから」という理由でいじめられ、「国帰れよ」等と言われたという。同じように排除された経験があっても、王さんはアンさんのように通名を使うという選択をせず、帰化したいと思ったこともない。台湾人としてのみ自己を位置づけている。それができるのは、国際児へのメッセージで「とりあえず『堂々として』と言いたいかな」という彼女の語りが示すとおり、名前や国籍で人を規定することがいかに無意味なことなのかを王さん自身が理解しているからである。

ハナコさんは、外見が原因で「外の人」として扱われた経験を持つ。何か相手と考え方や習慣が違えば、それを「ハーフ（であること）のせいに」されてしまうことがあったと語っていた。そのような扱いを受けた経験が「カナダというのも主張したいんですけど、でも・・・あの・・・主張したいけれど、日本人扱いされるほうがホッとする」という複雑な心境を彼女に持たせていると考えられる。

## （５）親の教育

王さんは、インタビュー後にいじめの経験についてより詳しく語って下さった<sup>34</sup>。いじめられて泣いて家に帰った時、母がいじめっ子のところへ行き「なんでうちの子がこんな目に合わなきゃいけないのよ」と言ったという。王さんは「母が強かったんですね」と語っていた。彼女の「堂々としていればいいんだよ」という国際児へのメッセージは、彼女自身が母から伝えられたものだと言えるだろう。

ハナコさんは、「親にずっと『特別だよ』とか『両方（の文化を受け継いでいるの）だよ』って言われてたので、そういう風に周りにも言えたら良いなって思います」と語った。自分を日本人とカナダ人の両方と位置づけるハナコさんのアイデンティティは、

---

<sup>34</sup> 掲載にご本人の許可を得た。

そのような親の教育にも影響を受けていることが予想できる。

#### 4-4. マジョリティ社会への欲求

##### (1) 差異化されない

・「帰化して日本人になっちゃえば、全部楽になるのに、なんでそこまでして（韓国人であることを）貫き通そうとするのか」、「自分がそういう（差別された）経験をしてきたから、あんまり人を『なに人だから』とか『どこで生まれたから』とか、そういうので判断しないようにしてる。」（アンさん）

・「なんで日本でずっと育って一緒に生活しているのに、それだけでいじめられるんだろう？」（王さん）

・「私、ずっと日本で育ったので、なんも変わらないはずなんだけどなあって。」（ハナコさん）

以上それぞれの語りが示すように、三人が共通して最も望むのは、名前、国籍、外見で「よそ者」として扱われないこと、そして、それらの枠を超えた「自分」という人間を見て欲しいということだろう。

##### (2) 自分の背景にある文化をマジョリティ社会が理解し尊重すること

・「見下されてる感じが結構して。なんか、馬鹿にされるじゃないけど・・・」「そういうの（韓流文化）に興味を持ってくれる人が多いというのは、ちょっと嬉しい。」（アンさん）

・「旅行とか増えたじゃないですか、台湾への。ああいうのがあったから、もう堂々と（台湾人であることを）言えるようになりました。」（王さん）

・「カナダというのも主張したい」（ハナコさん）

以上の語りが示すとおり、三人はそれぞれ自分の背景にあるもう一つの文化に対する、マジョリティ社会の理解と尊重を望んでいる。自分のルーツがある場所について他人によく知ってほしい、尊重してほしいと思うことは、国際児に限らず、多くの日本人マジョリティにとっても当然の欲求だ。だが国際児の場合、自分の背景にあるもう一つの文化に対してマジョリティ側がもつ感情や認識が、彼／彼女らの国際児としてのアイデンティティ形成に影響を及ぼすために、とても重要な課題なのである。

## 第5章 おわりに

本稿は、日本の国際児を事例として取り上げ、主体としての個人が、それぞれの親の背景にある文化と日本社会の文化のはざまで、いかにアイデンティティを形成しているのか、その過程と特徴を当事者の語りを通して解明した。この最終章では、これまでの内容をまとめ、結論と今後の課題を述べたいと思う。

冒頭で述べたように、本稿では、国際児を広義に捉え、「二つ以上の国や文化にまたがって生育した子ども」は全てそれに含まれるものとした。そして、社会構成主義に基づき、アイデンティティを他者との交わりにおいてのみ獲得される相互的なものだと捉え、個人のナラティブ（「物語」と「語り」）の中に、国際児たちのアイデンティティを捉えた。インタビュー協力者三人の語りと、それによって構築されたアイデンティティは、筆者と彼女たち一人ひとりとの相互作用の中で生み出されたものだった。

まずインタビューから明らかになったのは、国際児のアイデンティティ形成過程の多様性と主体性である。三人は、個人の歴史における周囲の人々との接触の中で、「よそ者」として差異化されたり、それを打ち消したり、或いは受け容れたりしながら、外部から張られる「〇〇人であること」「ハーフであること」というような「ラベル」の意味を読み替え、自らを位置づけていた。つまり、国際児は、既存の文化を内面化することによってのみ文化的アイデンティティを形成するのではなく、他者との関わり合いの中で、固定的な文化概念に基づいて押し付けられた言説に対して、自己の位置取りを選んでいるといえるのである。例えば、固定的な文化概念では、「日本国籍をもつ人」は「日本人」で「韓国国籍をもつ人」は「韓国人」であると捉えられる。法的な意味では間違えではない。しかし、アンさんは、韓国人として周囲から差異化されることを打ち消し、日本人であるという位置取りを選択していた。一方、王さんの場合、同じく国籍や名前によって差異化されることを拒みながらも、「堂々と」台湾人であるという位置取りを選択していた。ハナコさんは、「ハーフであること」を「なに人という概念に囚われず、どこの国でも生活できること」として、ハーフであることに自分なりの意味づけを行っていた。

また、国際児は複数文化のはざまに在ることによって、アイデンティティの危機や世代間の葛藤に悩む存在であるとされているが、必ずしもそうではないということがわかった。アンさん、王さん、ハナコさんにとっての最大の苦しみは、「〇〇人である」「ハーフである」という枠にはめられ、「人としての自分」を見てもらえないこと、日本で育ったにもかかわらず「よそ者」扱いされることであった。しかし、そのような経験をしながらも、三人は、それぞれ「国際児であること」の利点や自信を見出していた。

今後、さらに国際的な人の移動が活発になり、国際児が増加していくのは必至だ。日本社会はこれから国際児をどのようにケアしていけば良いのだろうか。その答えの鍵となるのは「教育」だと考える。アンさんは、「国際的な学校」と「日本的な学校」の間を移動した経験を振り返り、「周りの環境ってすごい大事」「周りの人がどのくらい理解あるかによって、自分は実は日本人じゃないことを言おうという気になるかならないか、

みたいなのにはすごい差があった」と述べていた。王さんは、国際児が「小さい時から受け容れられるような体制があったら、私みたいにいじめられるようなことはなかったのかな」と語っていた。ハナコさんは、「親にずっと『特別だよ』とか『両方（の文化を受け継いでいるの）だよ』って言われてたので、そういう風に周りにも言えたら良いなって思います」と親から受けた教育について教えて下さった。国際児の視点から、従来の固定的で画一的な教育のあり方、マジョリティ側の見方を捉え直し、マジョリティ側も巻き込んだ「国際児のための」教育を検討することがますます必要になってくると考える。

## ■謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご助力いただきましたことを、心より感謝申し上げます。なかでも、本論文を書くことによって私が得た最上のもは、三人のインタビュー協力者の皆さんとの出会いと対話でした。インタビューに率直にお話してくださり、お忙しい中、原稿のチェックなど、最後までご協力をいただき、本当にありがとうございました。協力者の方を紹介して下さった友人の鈴木さんにも感謝申し上げます。

また、本研究に際して様々なご指導を頂きました指導教授の塩原良和先生に深謝致します。そして、日常の議論を通じて多くの知識や示唆をいただいた塩原良和研究会の皆さんにもお礼を述べたいと思います。

## ■引用・参考文献

- 石河久美子（2003）、『異文化間ソーシャルワーク』、川島書店
- 川上邦雄（2010）、『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー—』、くろしお出版
- 鈴木一代(2004)、「「国際児」の文化的アイデンティティ形成 —インドネシアの日系国際児の事例を中心に」、『異文化間教育』19号、pp.42-53
- 鈴木一代（2008）、『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』、ブレーン出版
- 田丸徳善(1998)、「アイデンティティとは何か」、田丸徳善・星川啓慈・桜井元雄編『国際化時代のアイデンティティ—民族と文化の揺らぎのなかで』、春秋社、pp.3-22
- 船津衛（2011）、『自分とは何か—「自我の社会学」入門』、恒星社厚生閣
- デビッド・C.ポロック&ルース=ヴァン・リーケン著、嘉納もも訳（2010）、『サード



カルチャーキッズ 多文化の間で生きる子どもたち』、スリーエーネットワーク  
山本須美子(2002)、『文化境界とアイデンティティ—ロンドンの中国系二世』、九州大  
学出版会

スティーブン・マーフィー重松 (1994)、「マルチエスニック人と日本社会」、現代のエ  
スプリ 『異文化接触と日本人』、至文堂、pp.177-185

スティーブン・マーフィー重松 (2002)、『アメラジアンの子供たち—知られざるマイ  
ノリティ問題』、集英社

ジョン・W・クレスウェル著、操華子・森岡崇訳(2007)、『研究デザイン—質的・量的・  
そしてミックス法』、日本看護協会出版社

外務省「海外在留邦人数調査統計」(平成26年要約版、最終閲覧日 2014年12月2日、  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000049149.pdf>)